

## 「学園都市」への夢と模索

御笠五丁目にある公文書館の建物は、元国士館大学福祉専門学校の施設を改修したものです。福祉専門学校は平成7年当地に開講、同19年3月に最後の卒業生を社会に送りキャンパスとしての歴史を閉じます。学校用地の取得から数えると51年が経過しましたが、この半世紀は地域社会の歩みを考える上で特徴的なものとなっています。

平成29年に創立100周年を迎える国士館は本年3月『国士館百年史』史料編を刊行、その下巻には、昭和39年の校地取得から平成25年に市へ土地と建物を譲渡するまで、太宰府での開学に関する一連の資料が収録されています。

1960年代に始まる大学の規模拡大と総合学園化の潮流の中、新しい校地を求め、国士館は創設者・柴田徳次郎（しばた とくじろう）の生地に近い太宰府に好適な土地を見出します。候補地を視察した柴田梵天（ばんでん）（徳次郎息子）は昭和39年7月31日付報告に、当地は他の候補に比べ「静寂でもあり、天満宮様とも近いため、又町長を始め町を挙げて学校誘致に協力的であり、校地としては最も適当するもののように思はれ」と述べています。この地は「出発前日にわかに話が出たもので急いで視察を致し」町側との思惑が一致、すぐ



に買収の交渉に入ります。当時の町長は中村義雄（なかむら よしお）。日本が高度成長を遂げる中、太宰府町で学校・観光・住宅を三つの柱とする人口倍增計画を打ち出した人物で、現在市内にある大学はすべて中村町長の時代に誘致されたと言われています（『太宰府市史 通史編Ⅲ』）。

国士館は当初、太宰府に高等学校の設置を計画していましたが、周辺高校との交渉問題や県の私立校抑制政策により難航、柔道整復師養成校の設立へ変更を試みるも関係団体の反対にあい頓挫、開学までの道のりは険しいものとなりました。昭和62年、専門学校を設置することで計画がまとまり、用地の取得から31年を経た平成7年、ようやく時代に合った形で福祉専門学校が誕生します。学校祭やボランティア活動

を通して地域住民との交流も活発に行われましたが、周辺地域に介護福祉関連の学校が増加していく中、生徒の獲得が難しい状況となり、同19年に閉校となりました。（『国士館百年史』）。

昨年4月、国士館と太宰府市は文化交流協定を結んで武道・スポーツ・文化を中心とした交流を約し、地域との新たな関係を築こうとしています。